

全国にたくさんいた江戸時代の庶民剣士



東北大学名誉教授（歴史学）

新井 新

世の中に新選組のファンは多い。組長の近藤勇と副長の土方歳三を主役にしたドラマや小説も少なくない。二人は武蔵国多摩郡の農家（百姓身分）の出身だが、のちに幕臣に取り立てられたことも、よく知られている。だが江戸時代は、士農工商の身分制が厳しい時代だったといわれてきた。武士は武士、百姓は百姓というように、身分と職業は固定化し、なかなか変えることができなかったという見方である。

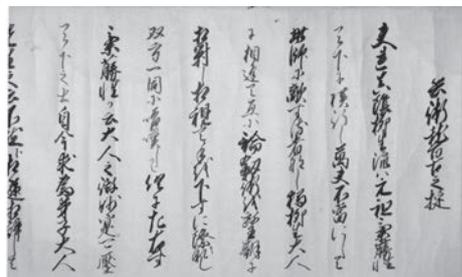
そのような時代であるにもかかわらず、なぜ近藤や土方は、百姓から武士の身分になることができたのだろうか。15年ほど前までは歴史学界でも、あの2人は例外だというのが通説だった。京都で反幕府運動をする浪士の取締りに新選組が活躍したので、その論功行賞だという解釈である。しかし、新選組は剣術家集団である。剣術といえば武士の特権ではなかったのか。そもそも百姓身分の者が、なぜ剣術家になれたのかという疑問がわいてくる。

新選組の前身は、幕末の1863年（文久3）に幕府が諸国の浪人たちを集めて結成した浪士組である。これに近藤と土方も参加していた。幸いなことに、230人余の隊員名簿が残されているのだが、武士身分の者は35%しかいなかった。60%超は百姓だった。浪士組には21人の小隊長がいたが、半数を超える12人は百姓出身だった。しかも、浪士組の事実上のトップである清河八郎も、出羽国庄内清川村の百姓家の出身である。武闘組織である浪士組と新選組は、武士の上に百姓が君臨した組織だった。

こうした実態には、調べた私も驚いた。つまり、近藤勇や土方歳三は例外ではなかったということである。この研究結果は、拙著『開国への道』（小学館、2008年）で紹介したが、その後の調査で、関東一円のほか、仙台藩領や出羽国にも庶民道場がたくさんあったことがわかってきた。いずれも、近在の百姓や商人たちが門人になっていた。出羽国置賜郡の庶民道場主は、高島藩や天童藩の剣術指南も務めていた。幕末に一世を風靡した北辰一刀流の千葉周作は仙台領の出身で、村方在住の馬医を父にもつ。彼も庶民剣士の一人である。全国的にも、新たな流派をおこした庶民剣士は少なくない。

こうした事実だけでも、従来の江戸時代のイメージは大きく変わらざるをえない。江戸時代は封建時代で、武士が威張った社会だった、という先入観を捨てて歴史を見ると、新しい発見がたくさんあって、じつにおもしろい。

なお、本誌の読者で、先祖は農家や商人だが、剣術の免許状や伝来の刀剣があるという方は、お知らせいただけるとありがたい。庶民剣士実在の歴史的証拠になると思われる。



「加美町の旧家に伝来する剣術
掟書。末尾に商人や農民など
51人の門人が署名している。」